

農業土木を 支えてきた人々

「印南丈作」・「矢板武」翁

—那須疏水の開削に尽力—

手塚 克*

関東地方の地図をひろげると、栃木県の北東部に「那須野ヶ原」の表示があり、いくつかの河川（その中ほどの二つの河川は水無川いわゆる伏流河川である）が流下している。この「那須野ヶ原」を横断しているのが、明治18年（1885年）に開削された日本の三大疏水の一つといわれる那須疏水である。

標題の二人は、この那須疏水の開削の恩人として私たちの郷土史に大きく名を留めている二人である。

さて、この那須野ヶ原と、那須疏水については各種の刊行物がある。したがって、くわしくはそれらによっていただくこととして、ここでは、この二人の先覚者と那須疏水、那須野ヶ原のかかわりを簡単にご紹介したい。

那須野ヶ原は、那須、塩原の連山のふもとに横たわる一大平野で、那珂川と箒川にはさまれた約4万haの地域をさしている。二つの地層は、火山灰の沈殿による凝灰岩が基盤であり山岳からの河川流出によりそれが掘削されつつ上層に厚い砂レキ層をつくり、これと薄い火山灰等のいわゆるローム層の互層からなっている。標高は、550mから130mで、地下水は北部で20mから30mと深く漸次浅くなり最南部においてはユウ水がみられ

る。したがって、古くからまったく水のなかった地域であったのである。この那須野ヶ原の北辺を区切る那珂川の中流域については、古代ひらけた証左の那須国造碑がある。しかし、「原」については中世鎌倉時代に富士の裾野の巻狩と同様大規模な遊猟が行われたとあるのみである。

江戸時代初期からは那珂川の支流の小河川上流からの用水開削が行われ藩領、天領の部落の飲料水、カンガイ水の確保がなされたとあるが、その大部分はまったく開拓されることなくこれら部落の草刈場となっていたといわれている。明治に至り新政府は殖産興業政策を進め、その一つとして原野の開拓を図ることとした。

印南丈作は、天保12年（1841）現在の日光市に生れ、のち那須郡佐久山宿の旅宿を業としていた印南家の養嗣子となった。田島薫氏の編書によれば、丈作の人となりは剛毅瀟灑、しかも愛情厚くして、殖産興業には殊に熱心であったという。有用の材であったので藩政にも参画し、明治4年（1871）佐久山宿名主を命ぜられた。佐久山宿は箒川右岸の高台にあり、那須野ヶ原を一望に収めることができる。丈作はこの原野の開拓は人々の生活を安定させ国益を増進させる、なんとか開墾事業を興した



印南丈作翁



矢板武翁

* 栃木県農務部土地改良課（てづか すぐる）

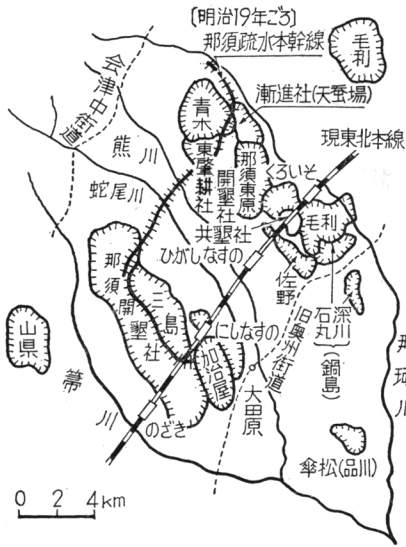


図-1

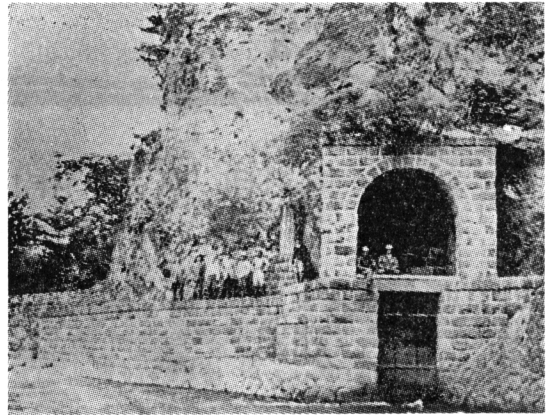
いと考えるようになった。

矢板武は、嘉永2年(1849)現在の矢板市に生まれた。代々の名主の家であり明治2年(1869)20才で矢板名主となり地方行政に参画するようになった。武は資性温良謹直にして、しかも大志あり貴公子の風があったという。公用で那須野ヶ原の南端を往復することが多く、都を離れることわずか40里の平たんなるこの土地をいたずらに雑草の繁るままにしておくのはなぜか、水利の便これこそがこの原を開拓し、国を益し世を利することになると考えるようになった。武は公用で文作にあり機会があった。文作より若輩であったが二人は不思議に意気投合し、談この事に及べば、時の移るのを忘れて語りあったという。

明治9年(1876)2人は時の県令に那須野ヶ原の開拓について意見を申し述べた。これから二人が地元勸業委員の協力を求め、同志数十名をつのり、開墾社の設立をなし、私財を投じて水路開削により政府を動かし、明治18年那珂川からの取水200個(5.5 t/sec)による那須野ヶ原の幹線延長約16 kmを開削通水するまでの努力と活躍が開始されるのである。

明治9年から疏水開削に至る10年間の2人の活躍を、さきの田島薫氏編書「那須野ヶ原」からおってみよう。

明治10年1月、二人は地方勸業委員の打合せにおいて、那須野ヶ原の開拓について時の県令に意見を述べたこと、そして県令から那珂川の河流を引入れ、原を横断し鬼怒川(県央を流れる別水系河川)に注ぎ、舟運の便を開くとともにこれを田用水に用いれば那須野ヶ原は日ならずして美田と化するであろう旨の、雄大な構想を開



当時の那須野ヶ原西岩崎水門

かされたことを語り、那須野ヶ原開拓は地方開発上急務であることを力説した。舟運は当時最上の輸送機関であった。委員一同はこれに賛意を表した。そこで印南、矢板を含む6名によって水路線を踏査することとし、2泊3日の行程によって現地調査を行った。この踏査行は実に那須野ヶ原開削の第一歩であり長く記念すべきことであると記されている。この踏査だけでは実際測量に着手するには不十分であり、印南、矢板の二人はその後数回現地を歩き、地形を観察し、地質を検査し、井戸があれば水面まで降りて地層を調査した。二人の苦慮したのは、地層が薄い表土の下に厚い砂レキ層があり、せっかく引入れた水も途中地下に浸透して、末端まで届くまいといわれることだった。

明治11年から翌12年4月にかけて、県もこれまで現地検分を行っており、水路線の測量が行われた。延長約44 kmであった。二人が先導したことはいうまでもない。これにより二人はいよいよ県を通じ、県内有力者で政府部内に面識者も多い安生順四郎の協力を得、政府への水路開削請願運動を開始した。この年内務卿伊藤博文、勸業局長松方正義らは福島県安積疏水の起工式の帰途、矢板らの懇請により那須野ヶ原を視察したが、この時松方は、水利はもとより必要である。しかしさきに視察した米国では皆陸田で畜力により相当の利益をあげている、この方針で早く開墾に着手するがよい。水利のことはその後考えても遅くはあるまいとの意見を述べた。当時この遠大な水路の工事見積は16万5千円の巨額であった。

明治13年、二人は、開墾事業に着手することとして同志を糾合し、会社組織の那須野ヶ原開墾社を設立した。そして、このころから他にもいくつかの開墾事業が起され始めたのである。

しかし水に不自由することは覚悟の上ではあったが、

水のないところに來住するものはない。牧畜を始めても牛馬に与える水もない。ここで窮余の一策、飲料水を得るだけの小規模水路を開削することとし、兩人は他の開墾事業者とともに工事を願ひ出た。

明治14年10月この願ひ出は認められ、県の直轄工事として着工された。しかし工事中において下渡金の不足を生じ工事が中止に至った。すでに開墾社には移住人がおり兩人は苦慮したが追願を重ねた。

明治15年11月、ついに飲料水路ではあるが那珂川の清流を那須野ヶ原によびこむことに成功したのである。

兩人はただ涙が溢れるばかりであったという。那須野ヶ原への移住者は入植はしたものの、どうしたものかとしていたがこのつぎることのない流水をみて腰がおちついてきた。印南、矢板の兩人は、そのうち水がくるから辛抱せよといいつづけてきたのである。那須野ヶ原の開拓はいよいよ盛んになってきた。

明治16年、兩人は各開墾場主を糾合し、自らその総代となって強力に大水路開削を政府に請願することとした。

明治17年は、国全体が不況におちいり、農民の窮乏はなほだしく那須開墾社の経営も容易でなかった。請願についても政府は「詮議相成難し」であった。兩人は開拓が始められたばかりの那須野ヶ原はこの先どうなるか、いろいろ相談し次のような方策をとることとした。

「大水路開削の予定線には、取入口下流にずい道掘削を必要とする部分があるが、請願が受入れられてもこの部分の工事が長びくようであれば容易ではない。したがって、私費をもってこれを試掘してみよう。そこまですれば政府も傍観はしてまい。いざとなれば財産を投出すまでである」と。

こうして、ずい道の試掘を行うこととした。そして資金を銀行から借入れ、この年の7月これに着工した。しかし10月には竣工も近づいたが借入金も使い果たし、給料等の未払いも出てきた。ここで兩人は最後の運動を行うこととし嘆願書を提出した。この嘆願書には、水路開削の風評もあり移住者多いこと、微力の限りをつくしたながらもはや才覚の手段なく、開削中止となれば移民の落胆

無限と記されている。

明治18年1月、兩人は上京し、政府に現地の実情を具陳し、条理を尽し熱誠を傾け懇願した。同年4月政府のようやく那須疏水開削を容れ、聞届けの指令がついに出示されたのである。明治18年4月15日那須疏水開削の起工式が行われた。この工事規模、人事の概要は次のとおり記されている。

1. **取入口** 那須郡西岩崎村に設け、那珂川の水を引入れる。水量は全水量 250 箇 (1 箇=0.027 m³/sec) のうち利用し得る見込水量 200 箇。
2. **水路延長** 取入口から那須開墾社地内に至る約 4 里半。その他数条の支線を設ける。
3. **特殊工事** この部分は暗キョとする。西岩崎村取入口から約75間。亀山村地内約 500 間。熊川河底約 30間。蛇尾川河底約 120 間。

工事総監督 内務省土木局疏水課長 南 一郎平

この工事にたずさわった人の直話として、印南、矢板兩人について次のように記されている。

印南翁は背がすなりとした余りこまかなことはいわぬ人だった。矢板さんは、よく気がつき、決して人をその場で叱るようなことはしなかった、と。

明治18年9月15日、大水路開削は進行し通水式を行うに至った。この間わずか5カ月間である。このあと直ちに4本の支線工事に着手、翌明治19年夏までには完成した。

古来一滴の水もないといわれた那須野ヶ原に清流滾々昼夜絶えず、ここに那須野ヶ原大発展の基礎が成ったのである。

このあと疏水の維持管理団体の祖ともなる那須水組の創立がなされたが、この創立ならびに運営にも、印南、矢板の兩人は指導的役割を果たしたのである。

今、那須疏水によるカンガイ面積は約 1,000 ha、疏水を流れる那珂川の水がつかることのないように、印南、矢板兩翁の思想は地元を受継がれ、あらたな那須野ヶ原開発事業が国営事業として那須野ヶ原の全体をつつんで施工されている。

[1979. 8. 20. 受稿]